

明けましておめでとうございます。
謹んで新年のお祝いを申し上げます。

昨年の元旦には能登半島で大地震が発生し、大規模な被害がでたことを思い出します。未だに被災された多くの方々が避難生活を余儀なくされている状況にはいたたまれない思いがしますが、皆様が穏やかなお正月を過ごされたことを願うばかりです。

さて、新しい年、令和7年が始まりました。石破政権が昨年誕生したものの、衆議院選挙で自民党は大敗北を喫し、野党の協力なくしては円滑な政権運営ができない状況まで追い込まれました。そして、今月20日には第2次トランプ政権が発足します。内外において、激動の一年になることは間違いないでしょう。どの国も自国ファーストの旗を振りかざし、自国エゴを剥き出しにして進むようになれば、ウクライナや中東という局地での紛争から大きな戦争にまで拡大する懸念を払拭することはできないでしょう。トランプ政権が脱炭素関連予算を60兆円削減するというような新聞記事（日経新聞朝刊 2024年11月21日）もありました。米国は保有する石炭、石油の消費量を増加させ、再生エネルギーの利用促進が滞るようなことになれば、同様な動きは全世界で広がり、地球温暖化対策における国際的な枠組みである「パリ協定」で定めた「今世紀末での気温の上昇を1.5度に抑える」という目標はまさに絵に描いた餅にしかならず、後々の世代へ「安心して生活できる地球環境を維持する」という責任など誰も負わないという社会になるのではないのでしょうか。本当に不安一杯の令和7年が始まりました。

新年早々から暗い話ではなんですので、ここで方向転換です。私的なことで恐縮ですが、私の母親が昨年12月に百歳を迎えました。百歳以上の高齢者は2024年9月現在で、9万5119人で過去最多とのこと（厚生労働省）。うち女性が全体の88%を占めているそうです。女性の方が男性の7倍も長生きしているのですね。母親の90歳からの変化を振り返ってみますと、この99歳という一年間で随分歳を取ったなと感じています（もう十分年を取っているのですが（笑））。98歳までは自身で極力杖をつけて歩くようにしていましたし、携帯電話も頻繁に使っていましたが、百歳を迎えた今は、歩くことも減り、物覚えも悪くなり、携帯電話で私にかけてくる頻度が落ちました。それでも電話、対面での会話は今もスムーズで問題なく、お互い楽しい会話（母親の毒舌も交えて）をしていますが、一連の会話の中で同じ話を繰り返すようになったことを実感し、百歳になるということは大変なことだと感じています。実は父親も長生きで98歳まで生きました。両親が長生きですので、長生きの家系とか、長寿の遺伝子を持っているとよく言われます。長寿の遺伝子なるものがあるのかについては、国内の百歳以上1000人を対象にした慶應義塾大学の調査で、「認知症、糖尿病や循環器疾患になりにくい遺伝的な背景を持つ人が一般的な日本人より多かった」という結果があります。なるほど、これは納得できるかもしれ

ません。

それでは、人はいつまで生きられるのでしょうか。まず頭に浮かぶのは秦の始皇帝です。神仙思想（不老不死の術を会得し、永遠の生命を得ようという思想）に染まった始皇帝は、不老不死の霊薬を捜す命を徐福という方士（神仙の術を身に付けた者）に下します。徐福は三千人の童男童女（若い男女）、百工（多くの技術者）を従え、山東半島（北は渤海湾を隔てて遼東半島に向かい合う中国最大の半島）の東方海上にある、不老不死の薬を持つ仙人が住む山と考えられていた蓬莱山を目指して旅立ちますが、秦に戻ることはなかったという記述が中国の歴史書「史記」にあります。徐福という詐欺師に始皇帝が騙されたという話もあり、また徐福の一行は日本に辿り着いて、住み着いたという伝説もあります。始皇帝は各地に不死の薬を探させたそうで、「不老不死」の薬を真剣に求めていて、驚いたことにその薬の原料と同じと信じた水銀を服用し、始皇帝陵内には水銀が流れる川が何本もあったとのこと。不老不死を求めて、結果として水銀を服用して死期を早めた始皇帝はさぞかし無念であったことでしょう。

ギネスブックが認めている世界一の長寿の方は122歳です。人の寿命の限界はどのくらいなのでしょう。昨年（2024年）の新聞記事で知ったのですが、「人生100年時代は来ない」ということでした（日経新聞 2024年10月8日）。詳細を別途調べてみますと、米国イリノイ大学で、1990年から2019年までの長寿国上位9カ国（日本、韓国、スイス、オーストラリア等）と米国の死亡率と平均寿命について調査したところ、「今世紀中に100歳までに生きる人の割合が女性で15%、男性で5%を超える可能性は低い」とのことです（期間を2019年までにしたのはコロナ感染の影響を除くためとのこと）。ということは、私はその5%に入れる自信がないので、百歳まで生きるのは無理と言えそうです。

しかし、今はAIの時代です。これからは違ってくる可能性はあるのかもしれませんが、米国のIT長者の男性が年200万ドル（約3億円）を投じて、47歳の肉体を18歳の肉体年齢に戻すために1日100錠を超えるサプリメントを飲んだり、アマゾン・ドット・コムの創業者も老化細胞を除去する技術を開発するバイオ企業に投資したりしています。AIを活用して医学や生物学の進歩に繋がれば、身体の老化を防ぐというあの「始皇帝の夢」も実現するかもしれません。「シンギュラリティ」（特異点：人工知能AIが人間の知能を凌駕する時点）を予測した思想家レイ・カーツワイルによれば、科学技術の急速な発展によって身体の老化が進みづらくなり、将来は寿命を500歳まで延ばすことが可能と予測しているそうです。本当に人間の欲望は果てしないものですね。

でも、ここでちょっと思うのは、身体が若返って長生きできたとしても、果たして楽しい人生を送れるのかは別問題だということです。少なくとも言えることは、長く生きることが幸せには直接繋がらないということです。一方で取り組まなければならないことは、

如何に住みやすく、安全で、楽しい社会を作り上げるかという難題です。たとえ自身が長生きできたとしても、地球の環境や我々の社会が悲惨な状況であれば、幸せな生活を過ごすことはできないでしょう。したがって、大事なことは「不老不死」を追求する前に、皆で力を合わせて、地球の環境を守り、より安全で、穏やかに過ごせる共生社会を築くことなのです。

今の私としては我が母があと数年穏やかな時間を過ごしてくれたらと思うばかりです。実家の隣に住んでいる姉の介護は相当なものですが、私もできる限り取り組む覚悟です。

それでは、引き続き倍旧のご厚情を賜りたく、お願い申し上げます。
今年一年の皆様のご多幸を心よりお祈りいたします。

令和7年元旦

株式会社サイモンズ
代表取締役社長
齊川 満



ヤンゴン（ミャンマー）市内 昨年8月撮影